深草学舎とその界隈、あの思い出の場所をいま想う

谷町法律事務所　弁護士
石坂　省悟
法学部法律学科
2006（平成18）年卒業
法科大学院
2009（平成21）年修了

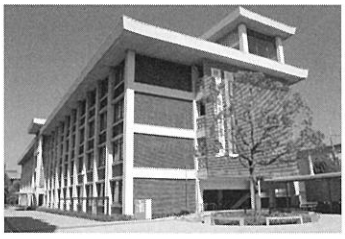
私が青春時代を過ごした深草学舎とのその界隈が、今変わろうとしている。いや、既に変貌を遂げたと言った方が正しいだろう。私は、学生指導や校友会活動で定期的に深草学舎に赴いているので、学び舎の変わりようを目の当たりにしている卒業生の一人として、僭越ながら筆をとりたいと思う。

執筆時から遡ること15年前、私は本学へ入学した。憧れの大学生活の第一歩となる最初のゼミナールで基礎演習を行っていた２号館、学年全員が受講することができる大講義室がある３号館は今も変わらない。

では、１号館はどうだろうか。幼少期に描いていた閉鎖的な研究室がそこにはあったが、現在は建物の向こう側の景色をも見通すことができる新館の和顔館が建っている。また、当時の深草学舎の中庭に森林があったが、今は開放的な中庭となり、学生が休息をとることができるスペースができている。森林があった場所には、「樹林」という名称のカフェがあるが、当時の思い出を残すためだろうか。

学生の遊び場はどうだろう。例えば、講義の空き時間や講義終了後に「パルケ」という遊技場によく行ったものだ。そこは、卓球台・カラオケ・バッティングセンター・ビリヤード等、遊び盛りの学生にとっては楽園のような場所であったが、娯楽の多様化が謳われるこの時代の波に飲み込まれたのか、残念ながら閉鎖してしまった。

私は、掛算ではなく、１＋１＋１…と少しずつ変わっている学び舎を認識しているはずであるのに、徐々に当時の姿を忘れるばかりか、現在の姿が当時の姿に記憶がすり替わっていってしまう。ただ、時代と共に深草学舎が変わろうとしても、卒業生は何も心配することはない。そこにいる学生は、先輩の記憶と教えが連綿と受け継がれているからである。

かかる執筆の機会を頂いたことにより、一卒業生として、これからも深草学舎と学生を見守っていきたいと改めて思った。

旧1号館。現在は取り壊され、その跡地には和顔館が建つ